交流文化

立教大学観光学部編集

2008. volume 07

交流文化 07

交流文化 07 ©2008
立教大学観光学部

ISBN 4-9902598-3-1

特集
観光と歴史

特集：観光と歴史

立教大学観光学部

交流文化 07

立教大学観光学部編集　表紙写真／Société des Bains de Mer

CONTENTS

特集

02 **観光と歴史**
TOURISM AND HISTORY

04 **近代リゾートの歴史を映す モナコ公国**
臺純子

16 **「観光団がやってきた」**
南洋群島住民にとっての「内地観光」
千住一

24 **江戸庶民の行動文化**
四季の日帰りレクリエーション活動の楽しみ
橋本俊哉

30 「交流文化」フィールドノート❼
パリ・シャンゼリゼ大通りにおける 空間利用調査
松村研究室

36 **旅行業と宗教**
日本の観光の原風景としての
中西裕二

40 読書案内
日本人の海外旅行の歴史をめぐって
『海外観光旅行の誕生』
『異国憧憬――戦後海外旅行外史』

42 立教大学観光研究所の活動紹介
北アフリカにおける観光調査

44 在外研究通信 04
シアトルの豚パレード
杜国慶

立教大学観光学部

観光学科／交流文化学科

立教大学観光学部は2006年4月、これまでの観光学科に加え、交流文化学科を新設し、2学科体制に移行しました。フィールドを世界に拡げ、リアリティに満ちた学びの場を提供するオンリーワンの観光教育を目指します。

立教大学観光学部
〒352-8558
埼玉県新座市北野1-2-26
TEL 048-471-7375

学部の紹介や入学案内については

http://www.rikkyo.ne.jp/grp/tourism/

［特集］

観光と歴史

TOURISM AND HISTORY

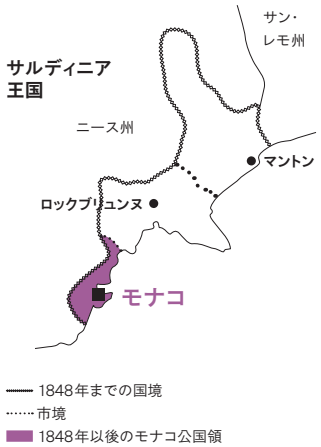
観光のグローバルな成長はめざましい。同時に様々な形態が生まれ、観光は刻々と変化している。いっぽう歴史をひもとけば、観光は今日われわれが目にし、体験する姿とは異なる相貌を見せる。19世紀に世界に先駆けて観光を国の柱に据えたモナコ公国の近代リゾート開発。戦前日本の統治下にあった南洋群島で実施された「内地観光団」。江戸後期にさかんに行われた花見や月見。熊野詣に見られる日本の「観光」の原風景。これらは観光の現在を映す鏡でもある。本号では、観光学における歴史研究の可能性を探る。

モナコで唯一、プライベートビーチを持っていたモンテカルロ・ビーチホテル（1928年開業）
写真／Société des Bains de Mer

近代リゾートの歴史を映すモナコ公国

文 臺純子
写真協力／Société des Bains de Mer、モナコ政府観光会議局

観光を国の産業の柱に据えたモナコ公国のリゾート開発は1856年に始まる。地中海に面したこの小国の観光地形成の歴史を通して、150年間リゾートとして生き抜いてきた理由を探る。



MODERN RESORT

取材先から研究対象へ

地中海に面した世界で2番目に小さな独立国、モナコ公国。公道でF-1グランプリカーレースが開催される唯一の国であり、またハリウッド女優グレース・ケリーが、モナコのレニエ3世と結婚した、まさに「シンデレラ物語」の国としても有名だ。モナコと聞くと、多くの人は、「F-1」かケリー公妃のエピソードをイメージする。かく言う私も、1989年、当時編集者をしていた雑誌の取材で初めてモナコに行くことになったとき、やはり「F-1」と「グレース王妃」しか思いつかなかった。モナコは公国であり、国家元首は「公」、その妃は「公妃」であって、「王」、「王妃」という尊称を用いることはしないということさえも知らなかったのである。

モナコを代表するオテル・ド・パリ、オテル・エルミタージュのほか、グラン・カジノやカジノ内のオペラハウス、あるいはF-1グランプリレースやモンテカルロラリーなどを運営するオートモービル・クラブ、そして世界最高のラクシャリー・スポーツともいわれる全長25メートルほどのマキシクラスのヨットのエキシビション・レースと、このイベントを主催する

海水浴治療施設として開業したバン・ド・メール・ド・モナコのポスター

ヨットクラブ・ド・モナコなど、取材先のすべてが、モナコのリゾートとしての歴史に深く関わっており、モナコが贅沢なリゾートと呼ばれてきた由縁の一端を取材を通して知ることができた。

しかし当時、オテル・ド・パリ、オテル・エルミタージュ、両ホテルの総支配人であったデル・アントニア氏が「このホテルに逗留されるお客様のトランクには必ずタキシードとピジャマが入っています」と語った意味を、本当に理解できたのは、ずいぶん後になって、オートクチュールデザイナー、ココ・シャネルの伝記を読んだときだった。ピジャマ（pyjamas）とは、フランス語でパジャマ、つまり寝巻きを意味するが、実は「ピジャマ」には、シャネルが1920年代、インドのゆったりしたシャツとズボンの上下服をヒントにして発表した海浜着の意味もあったのである。

それまで冬の避寒リゾートであったモナコは、1920年代には、上流階級の人々が日光浴や海水浴を愉しむ夏のリゾートに転換しはじめている。彼らは、ビーチやプールサイドで、昼は、水着にシャネルの「ピジャマ」をまとい、夜はタキシードやドレスに着替えてカジノやレストランに繰り出した。デル・アントニア氏は、贅沢なリゾートとしてのモナコのエッセンスを語ってくれていたのである。

日本では、1980年代半ばからの過剰投機による資産価格の高騰、いわゆる「バブル経済」が海外旅行者数激増を後押しし、1987年に運輸省（当時）が提案した、1986年の海外旅行者552万人を、1991年までの5年間で倍増させるという「テン・ミリオン計画」も1990年に達成された。しかし1990年代に入るとバブルが崩壊し、1987年の総合保養地域整備法、通称「リゾート法」のもと、全国各地で第三セクターなどが開発したリゾートが次々と破綻した。様々な要因があげられているが、海外旅行を通じて、本場のリゾートを経験した人たちにとって、施設だけは立派だが、内容が伴わない「箱物」開発によるリゾートが魅力的に思えなかったとしても不思議ではない。

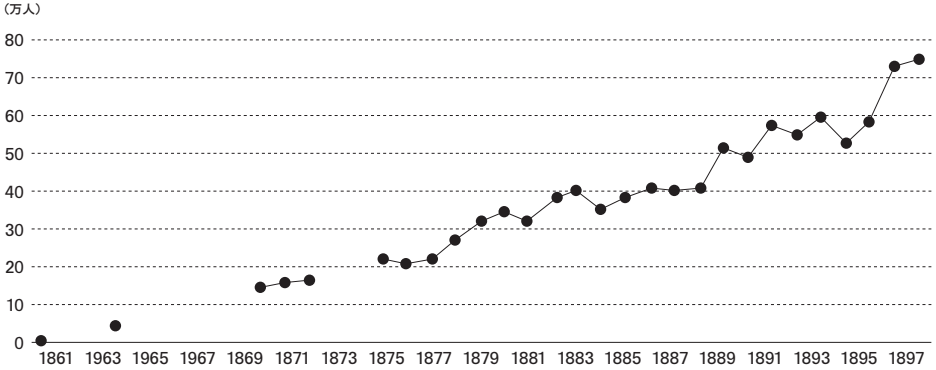
1998年、99年と続けてモナコ取材の機会に再び恵まれたとき、日本各地で次々と開発されたリゾートが、あっけなく破綻していくのに、なぜモナコは150年もの間、贅沢なリゾートとして生き抜くことができたのだろうと考えた。欧米における近代リゾートは、ヨーロッパやアメリカの、特に王侯貴族や大富豪たちの暮らしや、それぞれの時代の社会構造と密接に関わってきたことを、初めてのモナコ滞在以来、様々な取材を通じて知ってはいたが、きちんと整理したことはなかった。モナコはどのようにして贅沢なリゾートと言われるようになったのか、その歴史をたどってみよう。それによって、モナコが150年間、贅沢なリゾートとして生き抜いてきた秘密が分かるかもしれない。取材先としてのモナコ公国は、こうしてリゾート研究の対象となった。

モナコ公国観光地形成の歴史

フランス革命、ナポレオン侵攻などによってモナコ公国は、フランス領、サルディニア王国保護領と、その帰属がめまぐるしく変わった。そして1848年、イタリア王国建国を目指すヴィットリオ・エマヌエレ2世は、モナコ公国領のロックブリュンヌとマントンを占領する。モナコ公国はこの両市の統治権をフランス第二帝政時代のナポレオン3世に割譲することで、ようやく独立を維持した。しかし、これによって領土の95パーセントを失ったモナコ公国は、経済危機を打開するため、観光を国の産業の柱に据えたのである。

モナコの観光開発は、フランス人のラン

モナコ公国、19世紀の来訪者数



資料：Journal de Monaco（1861年-1902年）から筆者作成

1860年代前半に建設されたカジノ

サル・ガルニエ

左の小さな建物がカフェ・ド・パリの前身カフェ・ディヴァン

埋め立て工事により拡張されたフォンヴィエイユ地区　©Miti Info Image/DTC

美容・健康医療施設として世界的に有名なレ・テルム・マラン・ド・モンテカルロ

モナコF-1グランプリ

モンテカルロ国際サーカスフェスティバル
©JC VINAJ/MITI INFO IMAGE

グロワとオーベールにカジノの利権を与えた1856年に始まる。以後、約150年におよぶホテルやカジノなどの観光施設建設、鉄道や道路などインフラ整備の状況を時系列で整理し、さらにモナコを訪れた人々の写真やモナコを舞台にした映画、文学作品などから、モナコに滞在した人たちと、その滞在スタイルを読み取るという手順で研究を行った結果、モナコ公国の観光地形成は、次のような6つの時期に分けられることが分かった。

第1期［挑戦と挫折：1856年－1860年］

観光による国づくりを企図し、夏の集客のために海水浴治療の施設を、冬の集客のためにカジノを作ったが、カジノは失敗に終わり、海水浴治療の施設は、避寒客の施設へと変質する。従来、コート・ダジュールは避寒リゾートとしてスタートしたと言われてきたが、モナコ公国の観光開発初期においては、冬はカジノ、夏は海水浴治療という2シーズン制で集客をはかろうとしていたことが明らかになった。

第2期［雪辱戦：1863年－1889年］

第1期の失敗を踏まえ、ドイツ・ハンブルグから招聘したフランソワ・ブランに、インフラやアクセス整備を行うという条件で、カジノの独占権を与えた。そしてグラン・カジノやカフェ・ド・パリ、オテル・ド・パリなど、現在のモナコ公国を代表する観光施設が次々と作られ、ガス、水道、電気などのインフラ整備や、鉄道、道路などのアクセス整備も行われた。この結果、モナコへの来訪者数は1861年には、814人に過ぎなかったが、1889年には50万人になるなど、避寒リゾートとしての地位を確立した。

第3期［充実と女性：1893年－1935年］

美術館、博物館、映画館などの建設や、スポーツ、文化など様々なテーマのイベント開催（写真5）などにより、「観光地」としての魅力が充実する。また第一次世界大戦を経て、タブーの意識が変化し、女性の社会進出が進む中で、女性を重要なマーケットとして位置付けていった。第1期に造られた海水浴治療施設は、タラソテラピー施設としてカジノ広場近くに移転新築された。

またフランスきっての大富豪の家に生まれ、趣味で写真を撮り続けていたジャック・アンリ・ラルティーグの写真集などから、コート・ダジュールの避寒リゾートが、夏のビーチリゾートへ変質し始めたのは1920年代初期であることが分かった。しかしモナコやイタリアのマントンを中心に発行されていたマントン・アンド・モンテカルロ・ニュースという英字新聞を分析した結果、1930年代半ば過ぎまでは、避寒需要のほうが多かった。避寒リゾートから夏のビーチリゾートへの転換は徐々に進んだ。

第4期［戦争による中断：1939年－1945年］

カジノの閉鎖、イタリア、ドイツによる占領など、戦争によってモナコ公国の観光開発が中断した。

第5期［再生のためのインフラ：1946年－1984年］

コート・ダジュール全域が夏のビーチリゾートへ本格的に変質し、来訪者も、王侯貴族や富裕層などから一般の観光客へと大きく変わる中で、モナコ公国にも同様の変化が起きたと考えられる。こうした中、モナコ公国は、埋め立て工事による国土拡張、コンベンション施設建設などのインフラ整備を集中的に行なった。さらにレニエ公とグレース公妃夫妻が主導して、テレビ、映画、サーカスや花など、誰にでも分かりやすい華やかなテーマのイベントを創設した。

第6期［ユニークな「観光地」：1985年以降］

モナコ公国を象徴するグラン・カジノと周辺観光施設の「復古的」改装・改修や、21世紀に向けて行われた浮き桟橋の建設や鉄道駅の地下化、コンベンション施設の新設などの5大プロジェクトの実施などによって、モナコ公国は「真のユニーク」な「観光地」[1]として存続し続ける決意を表明したと考えられる。

世界は変わり続ける

モナコ公国の観光地形成の歴史を整理してみると、2つの大きな変化が見えてくる。

第1は、訪問者の属性の変化である。第2期、第3期までは、王侯貴族や富裕層、あるいは芸術家、文化人などが訪れていたのに、第二次世界大戦を挟んで、第5期以降は、一般観光客、コンベンション客へと様変わりした。これは戦後に普及したソーシャル・ツーリズムの流れを受けて、一般の人々がバカンスや観光旅行に出かけるようになっただけでなく、ヨーロッパや中近東などの多くの王室が1910年代から第二次世界大戦前後に姿を消したという社会変化の影響も大きい。本物の貴族にかわって、華を添える役割を果たしたのが映画や演劇界のスター[2]たちで、第二次世界大戦後に、映画やテレビ関係のイベントが創設されたのは、こうした変化と無関係ではない。

第2の変化は、滞在スタイルと滞在時期の変化である。モナコでは、第1期に冬・夏、2シーズン制の集客を試みたが失敗した。第2期は、まさに避寒リゾート一色の時代であった。しかし第一次世界大戦終結から第二次世界大戦勃発までの、ベル・エポック時代に、女性の自立、社会進出が進む。第3期になると、富裕層の中でも流行に敏感な人々が、冬だけでなく夏にも、モナコを含めたコート・ダジュールを訪れるようになっていく。モナコでは唯一、プライベートビーチを持つホテルであったモンテカルロ・ビーチホテルの開業は1928年であり、滞在スタイルと滞在時期の変化をとらえたものと言えるだろう。第二次世界大戦後は、完全に夏のビーチリゾートへと変質し、コンベンションやインセンティブ誘致は、冬場の「オフ・シーズン対策」という役割を果たすことになる。「日焼け」が労働者階級の代名詞であり、特に上流の女性にとって肌を晒すのがタブーであった時代には、夏の集客は成功せず、「日焼け」がお洒落なこととなって初めて、夏のビーチリゾートへの転換が可能となった。滞在スタイルの変化は、価値観の変化によって引き起こされたのである。そして王侯貴族や富裕層が訪れていた避寒リゾート時代には、11月頃から翌年3月頃まで約半年も滞在したが、第二次世界大戦後、一般客も訪れる夏のビーチリゾートへ、さらにコンベンションリゾートへと転換していく中で、数泊程度の滞在へと変化した。

いずれの変化も、モナコが企図したものではなく、外的要因の変化に対応した結果である。第2期に、ホテル王セザール・リッツとオーギュスト・エスコフィエのコンビで黄金時代を築いたグランドホテル・モンテカルロなどの高級ホテルも、第5期に入ると撤退、廃業した。外的要因の変化に対応できなければ、モナコの高級ホテルといえども破綻してきたのである。

150年リゾートとして生き抜いた秘密

リゾートは、ホテルなどの施設を造りさえすれば、そのまま放っておいても儲かるというものではなく、世界や社会が変化し続けるのに合わせて、常に新しい企画やアイディアを注ぎ込み続けなければならない。スタッフの育成にも時間がかかる。モナコのホテルやレストランでは、何代にもわたって同じホテルやレストランで働いているというサービススタッフも

地下化されたモンテカルロ駅構内

コート・ダジュール地域でも屈指のコンベンション施設、グリマルディ・フォーラム　© JC VINAJ/MITI INFO IMAGE

多く、そのことに誇りをもっている。

日本ではリゾートさえ造れば儲かると言われたが、その多くが破綻した。それなのに、近年、今度は「カジノさえ造れば儲かる。観光も地域も発展する」と言いだした。モナコ公国において、カジノによる収入は、1980年代半ば以降、国家予算の4パーセントに満たない。日本がバブル景気に浮かれている頃すでに、モナコ公国はカジノに頼らないリゾートへの道を探り、この20年を地道に積み重ねてきた。モナコが150年以上もの間、贅沢なリゾートとして生き抜くことができた秘密は、モナコ公国公宮殿に長年つとめ、さらに海洋博物館でモナコ公国の歴史を研究してきたカル・パンーランクル女史が「モナコ人が、カジノの売り上げで楽をしてきたというのはまったくの誤解です。いつも必死に働き続けてきたのです」と語った、まさにその言葉に尽きる。

モナコを対象にした研究は、観光が、遊び気分や思いつきや横並び意識でうまく行くものではないという取材者としての実感を確信に変えた。同時に、次の一節を思い出させてくれたのである。

「自分たちの文明を、間違いない見方で観察することは、決して容易なわざではない。この目的を果すには三つのはっきりした方法、即ち旅行、歴史及び民族学があり、私がこれからいわなければならないことは、すべてこの三つの方法で思いついたのだが、そのどの方法も客観性をもたらす点で、外から思われるほど大きな助けとなるものではない。（中略）……欠点があるにもかかわらず、旅行、歴史及び民族学は、最上の手段であるので、私たちはできるだけ多くこれを利用しなければならない」[3]。モナコ公国の観光史を学ぶことは、現代日本の観光と社会を観察するための方法でもあるといえよう。

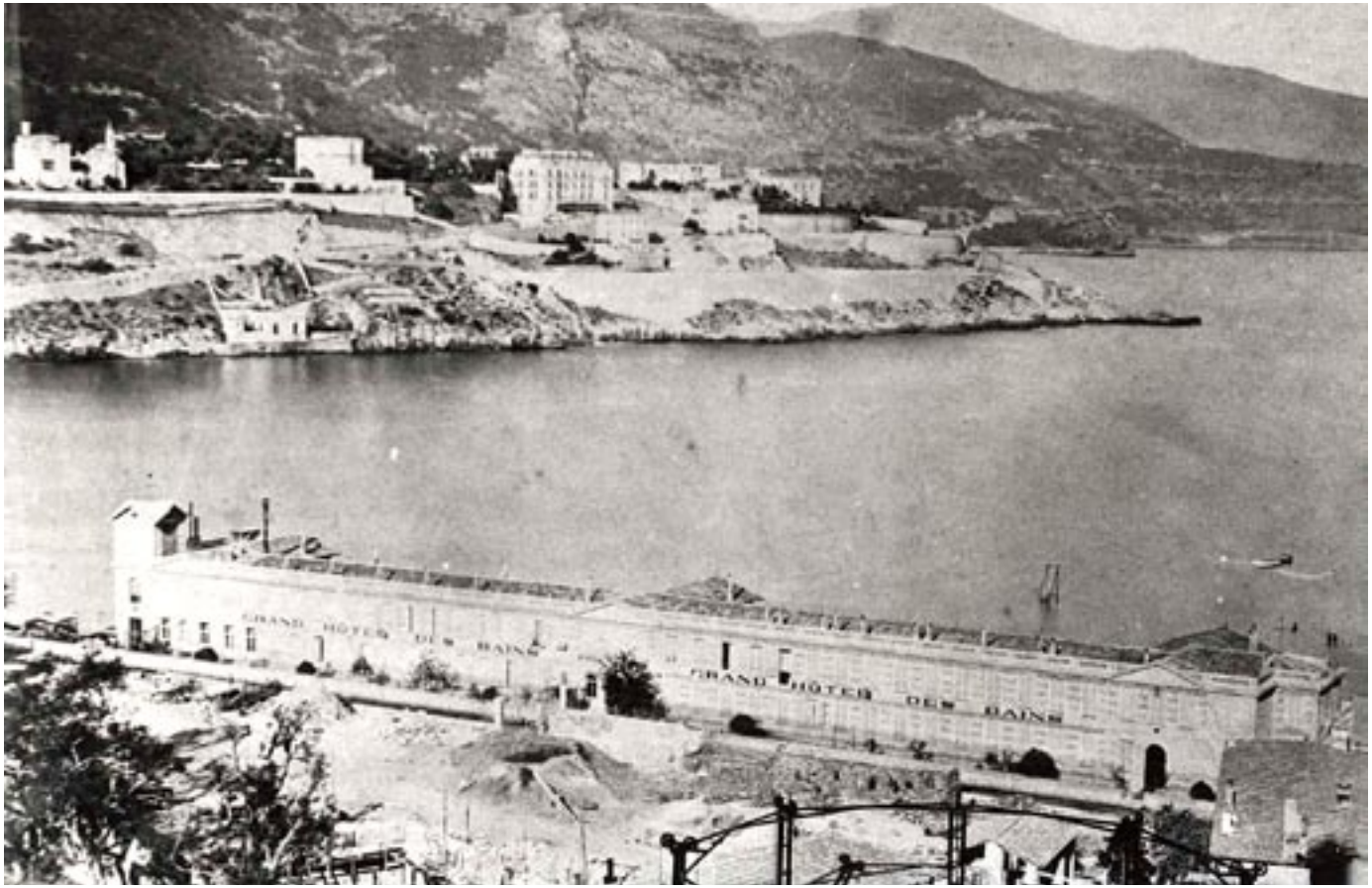
参考文献

1) Butler, Richard W.（1980）The Concept of a Tourist Area Cycle of Evolution, Canadian Geographer, XXIV（1）:5-12.（＝毛利公孝・石井昭夫訳（2002）観光地の発展周期に関する考察．立教大学観光学部紀要，4：98-103.）

2) Corbin, Alain ed.（1995）L'avènement des loisirs（1850-1960）.（＝渡辺響子訳（2000）レジャーの誕生．藤原書店，560p.）

3) Russel, Bertrand Arthur William（＝堀秀彦・柿村峻訳（1974）怠惰への讃歌．角川文庫，206p.）

湾の向こう側にグラン・カジノや高級ホテルが次々と建てられていった



モナコ公国の観光地形成の時代区分とその特徴

時代区分	観光開発の特徴 ハード面	ソフト面	アクセス面	来訪者の属性の特徴	滞在期間・時期、滞在スタイル
第1期（1856-1860） **挑戦と挫折**	カジノ創設とホテル建設、海水浴治療施設開業			海水浴治療を好んだのはイタリア人	
第2期（1863-1889） **雪辱戦**	カジノ、ホテル、カフェ施設、広場、庭園、音楽キオスクなど	カジノ広場で音楽演奏、日傘美人コンテストなどを開催	フェリー、鉄道、道路の整備	王侯貴族や富裕階級	避寒シーズンは11月から5月で、約半年。避寒目的であるが、社交空間でもあった
第3期（1893-1935） **充実と女性**	文化・芸術・科学・スポーツなどの施設建設。モンテカルロ・ビーチホテル開業	モータースポーツや文化的イベントの創設、国際会議の誘致	周辺地域からモナコに入る山越え道路、立体化など	前期の来訪者に加え、自立した女性が目立つようになる	避寒シーズンは11月から5月で、約半年。一部の人は日光浴や海水浴を楽しむため、夏にも訪れるようになる
第4期（1939-1945） **戦争による中断**	建設中止、カジノ閉鎖				
第5期（1946-1984） **再生のためのインフラ**	休廃業のホテル跡地の整備。コンベンション施設。グラン・カジノ、カフェ・ド・パリなどの「復古的改装」	テレビ、映画、サーカス、花火など誰にでもわかるイベントの創設	鉄道路線の地下化とそれに伴う道路整備。駐車場の整備も進む	ソーシャル・ツーリズムの流れを受けた一般のバカンス客や観光客。コンベンション客も登場。イベントの参加者として映画や演劇などのスターが数多く訪れる	滞在日数は、観光が4泊程度、コンベンションは70年代/5泊前後、80年代/4泊前後。夏の海水浴、日光浴、観光。イベントの通年化が進む
第6期（1985-現代） **ユニークな「観光地」**	5大プロジェクトの実施/2000人規模の多目的施設、浮き桟橋、新ホテルなど	IT対応など、ホテル客室の改装、ル・テルム・マラン・ド・モナコ（美容と健康）開業（1995）	高速道路との接続、駅の地下化	コンベンション客が3割を占める	滞在期間は80年代以降横ばい

モナコ全景 ©Miti Info Image/DTC

観光団がやってきた

南洋群島住民にとっての「内地観光」

文 千住一

1915（大正4）年、日本統治下の南洋群島で実施された、地域住民を日本に呼んで実見させるという内地観光団。その諸相は、近代日本における「観光」概念がどのように位置づけられていたのかを問うための糸口を提供してくれる。

椰子の下へ　酋長団の帰郷　去月二十七日横須賀入港以来、連日に亘りて各地を観光したる南洋酋長団一行は、十三日の鎌倉見物を以て内地観光の終りを告げたれば、予定の如く十四日午後一時横須賀出帆の南海丸にて、帰島の途に就きたり。是より前、出帆当日の一行は、愈、数日後には懐かしき我島に帰らる、と聞き、今迄の疲れも忘れて一同嬉々として早朝より起床し、各地よりの土産物を一杯に詰込みし行李を携へ、午後一時十分、河原監督大尉より愈、出帆と言渡されて、珍客一同今更の如く無量の感慨に打たれ、中には上甲板に走せ上りて遙に別れを惜むもありたり。斯くて同船は、正一時と云ふに錨を捲いて、油の如く風渡りたる海面を辷るが如く走り去りたり。

これは、一九一五（大正四）年八月一五日付けの『国民新聞』に掲載された記事である［句読点は引用者が適宜補った。以下同じ］。このなかで「珍客」と称された彼らは一体何者であって、そして、彼らを乗せた船は一体どこへ向かっていったのであろうか。

一九一四年一〇月、日本は第一次世界大戦への参戦を契機に、それまでドイツ領であったミクロネシア一帯を占領し、当該地域を「南洋群島」として統治、支配した。そして、南洋群島の統治行政にあたった臨時南洋群島防備隊［以下、防備隊］は早速、地域住民のなかから首長関係者や実力者を選抜し、数週間にわたって日本本土の様子を実見させるという方策を企画する。「内地観光団」［以下、観光団］と呼称されたこの住民統治政策は、一九二二年に統治機関が防備隊から南洋庁へ移管されてからも続けられ、一九二〇年を除く一九一五年から一九三九年まで年一回ずつ実施された。その結果、延べ約六六〇名の南洋群島住民が観光団に参加し、内地を訪れることとなる。

言うまでもなく、右の記事で言及されているのは、一九一五年に日本統治下南洋群島から派遣された第一回観光団のことである。無論、八月一四日に横須賀を出港した南海丸の行き先は、彼らが日常生活を送る南洋群島であった。本稿では、一九一五年の夏に日本を

ドイツ、日本、アメリカに統治され続けたミクロネシアの歴史を感じさせる風景

訪れた第一回観光団の諸相について取り上げてみたい。

観光団が目にしたもの

観光団は、新占領地としての南洋群島における住民統治という関心の下に整備され、その参加者は、一般住民に対して影響力を持つ名望家たちとされた。そして実際、一九一五年に組織された第一回観光団には多くの住民有力者が参加し、この傾向は、後に組織された各観光団においても引き継がれることとなる。先に見た新聞記事が、観光団を「南洋酋長団」と表現したことの背景には、こうした理由が存在する。

さて、七月下旬に横須賀に到着した観光団一行は、横須賀鎮守府において軍艦、飛行機、工廠などを実見した後、八月一日に東京駅へ降り立つ。その翌日から一行は、現在の皇居にあたる宮城への遙拝を皮切りに、歩兵第三連隊、世田谷野砲連隊、戸山近衛騎兵連隊、小石川砲兵工廠、遊就館、靖国神社といった軍関連施設や、三越呉服店、帝国劇場、上野動物園、浅草での活動写真といった、当時の東京における「娯楽」と関連した場所を訪問し、すでに見たとおり、一四日に南洋群島へ向けて横須賀を出発する。

これら第一回観光団が内地において訪れた場所、すなわち、観光団参加者たちに見せようとした事物に込められた意図について指摘するならば、それは、南洋群島に対する日本の圧倒的な優位性の提示という点に尽きよう。つまり、近代化され規律化された日本の軍事力を、そして、帝都東京で勃興した消費社会型の生活様式を、それぞれ南洋群島住民の代表的立場にある参加者に見せつけることにより、ドイツにかわる新たな統治者としての「日本」の姿を、強く印象づけようとしたのである。こうした観点からすると、一連の「東京観光」が宮城遙拝から始まったという事実は、極めて象徴的な意味を持ち得る。

新聞報道のなかの観光団

冒頭でも引いたように、南洋群島からやってきた観光団の内地における動向は、当時の東京でひろく流通していた新聞各紙に、頻繁に取り上げられている。しかし、そこでの論調を通覧してみると、「驚異」や「畏怖」といった観点から、観光団の姿を描き出そうとする傾向が強いことに気がつく。

いくつか例を挙げてみると、七月二九日付け『万朝報』は、横須賀に入港した際の観光団の様子について、「追浜から飛んで来た飛行機が船の上に円形を描いたのを見て、何れも目を円くし、あれは何という鳥ですと聞くから、よく説明してやると二度吃驚した」と伝える。また、七月三〇日付け『時事新報』は、横須賀鎮守府で軍艦朝日による空砲発射訓練に接した一行の様子を、次のように報じている。「其凄じき光景に奇声を発して喜び合ひ、中には殷々たる砲声に驚き、甲板上に突伏す者さへありたり」。

あるいは、三越呉服店にて、エスカレーターとエレベーターを利用した際の観光団の様子を、八月四日付けの『時事新報』と『中外商業新報』はそれぞれ、「初め平面に乗つて動き出し、階段となり初めた瞬間には［中略］、不審と恐怖に襲はれて手摺に嚙り付いた者が多かつた」、「箱の中へ入るのからして気味悪るげであつたが、音もなく登り出すと、尻餅をついて驚いたものあれば、『下から誰か押し上げてゐるのだらう』と奇妙な断定を下した男もある」など書く。

加えて、新聞各紙による観光団報道は、こうした文章による記述のみにとどまらなかった。つまり新聞各紙は、各訪問先における一行

右上）三越呉服店での記念撮影　右下）南洋群島の風俗を伝える絵葉書　左上）船上および東京駅前での第一回観光団　下）東京駅に到着した際の様子を伝える新聞記事

の姿を撮影し、観光団の様子を伝える文章の傍らにそれらの写真を掲載することによって、より説得的な記事を構成したのである。その顕著な例が、「東京観光」に先立って行われた宮城遙拝に関する一連の報道であろう。

このときの様子はいくつかの新聞によって取り上げられているが、なかでも八月三日付の『報知新聞』は、宮城を臨む二重橋前で、日章旗の小旗を手に頭を下げる一行の写真を掲載しながら、「右手に日章の小旗を振りつゝ、恭々しく脱帽して最敬礼」と伝えている。

新聞報道が意味するもの

果たして、これらの新聞報道は、単に、「南洋」から観光団がやってきて日本の姿に驚いて帰っていった、という出来事を読み手に伝えただけだったのであろうか。この点について踏み込んで考えてみるならば、一連の観光団報道はまず何よりも、各新聞の読者層たる東京の市民に対して、第一次大戦での「戦果」を、より現実的なかたちで提示することを可能にしたと言うことができよう。すなわち観光団とは、日本が第一次大戦においてドイツから奪取した南洋群島の住民代表者たちの集まりなのであって、新聞紙上で観光団の姿が取り上げられることにより、南洋群島を占領したという事実そのものや、そこに居住する人間たちの実際といったものが、読み手に対してより具体的に示されたのである。

そして、各新聞のなかで描き出されたのは、帝国日本あるいは帝都東京が有している「近代性」や「文明性」、「支配者性」といったものに対して、恐れ、戦き、跪く観光団参加者たちの姿であった。つまり観光団は、これらの描写を経由することにより、「前近代性」や「非文明性」といった「後進性」のみならず、「被支配者性」をも抱え持った集団として、位置づけられていったのである。先に挙げた一行の宮城遙拝にまつわる新聞報道が、日本の新たな支配民としての観光団の姿を浮き彫りにした端的な例であることは、指摘するまでもない。

さらに言うならば、これら一連の観光団報道を通じ、最終的に新聞読者たちが手に入れたのは、ドイツという西欧列強の一角を打ち破り、南洋群島という新占領地ならびに新支配民を手に入れ、そこに居住する住民たちを従属させるに十分な「先進性」と「支配者性」を保持しているという、些か自惚れに近い「自画像」であった。

「媒介／媒体」としての観光団

ところで、冒頭で掲げた新聞記事には、観光団は大量の「土産物」を抱えて南洋群島に帰島した、とある。いくつかの新聞報道から総合的に判断すると、そのほとんどが三越呉服店で購入されたものであり、また、各訪問先から贈呈された品々であった。観光団が南洋群島に持ち帰ったとされる「土産物」をいくつか列挙するならば、時計、石鹸、鏡、衣服、靴、布、馬の置物、おもちゃの鉄砲など、多岐にわたる。しかし、内地を訪れた観光団が南洋群島に持ち帰った最大の「土産物」は、一連の行程における「見聞」であり「経験」であったに違いない。

上述した新聞報道における観光団描写も含め、観光団という存在が果たした役割について最後にまとめるならば、観光団は、宗主国である日本と占領地である南洋群島とのあいだを、様々なかたちで「媒介」したと言える。つまり観光団は、日本と南洋群島のあいだを行き来することにより、新たに占領した南洋群島の姿を日本に伝えるとともに、新たな統治者となった日本の姿を南洋群島に伝える「媒体」として機能した。この観点において、「南洋」からの観光団一行は、単なる「珍客」という表層的な表現だけでは説明することのできない、当時の日本と南洋群島のあいだの関係性を内包した役割を担っていた、と結論づけられる。

既述のとおり、約二〇日間にわたる内地滞在を経た後、観光団一行は南洋群島への帰途に就く。しかしながら、新聞報道に晒されながら「内地観光」を行うことにより、帝国日本の新たな支配民の「表象」となった参加者たちはもはや、新占領地たる南洋群島への帰島に際し、「無量の感慨に打たれ」、「遙に別れを惜む」ような存在として描かれるほかなかった。

「観光」概念の歴史化

ここまで見てきたような、日本統治下南洋群島における第一回観光団の諸相は、近代日本において「観光」という概念がどのように位置づけられていたのか、といったことを問うための糸口を提供してくれよう。これまでの研究は、「観光」という言葉の原初的な意味について、「国や地域の光をみる／みせる」と説明してきた。だとするならば、近代日本が新たに手に入れた南洋群島において組織された「観光」団が、宗主国たる日本内地において、「何」を「どのように」「みた／みせられた」のかについて論じることによって、近代日本における「観光」という概念のポジションは、より明確になっていくはずだ。

すなわち、本稿で取り上げた観光団という存在は、近代日本において、対外的に示されるべき「国の光」がどのようなプロセスで形成されたのか、あるいは、「みる／みせる」という行為がどのような意図の下で操作されていたのか、といった課題を掘り下げていくためのひとつのきっかけになる。さらに言うと、今日において当たり前のように使用されている「観光」なる言葉を、近代から現代にかけて日本が辿ってきた道程のなかに位置づけていく作業、換言するならば「観光」という概念の「歴史化」、を試みるための視座を、南洋群島からの観光団は提供してくれるのである。

上）アジア太平洋戦争で多くの日本人が「自決」したバンザイクリフ　中）日本に続いてアメリカがミクロネシアを統治した　下）サイパンに現存する日本家屋

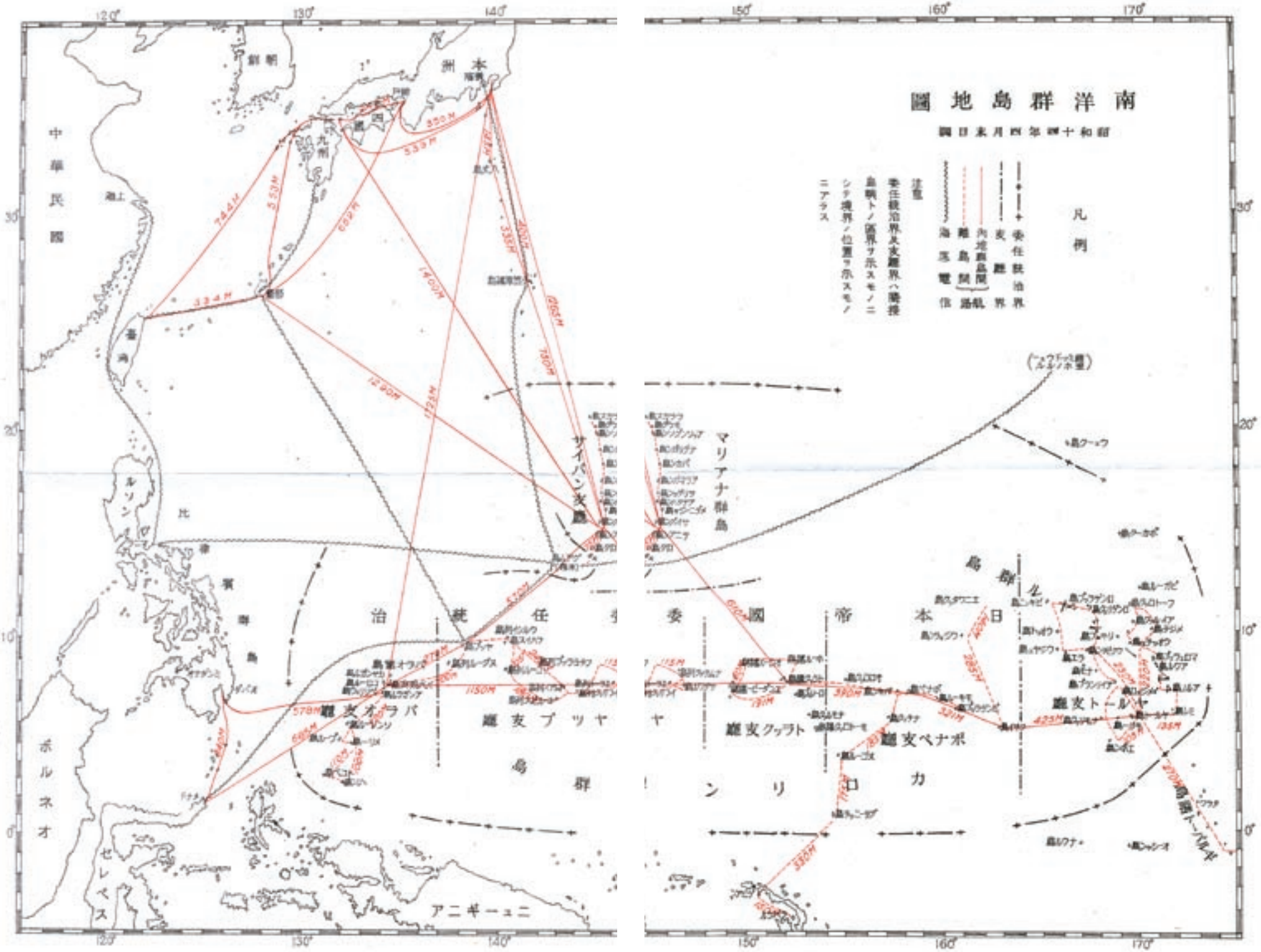
注

本稿では、今日において差別的表現とされる語句が引用されているが、これは、本稿が依拠した史料の成立背景および時代特性によるものである。

参考文献

●千住一「「観光」へのまなざし――日本統治下南洋群島における内地観光団をめぐって」（遠藤英樹・堀野正人編『「観光のまなざし」の転回――越境する観光学』春風社、二〇〇四年）。
●千住一「日本統治下南洋群島における内地観光団の成立」（『歴史評論』六六一号、二〇〇五年）。
●千住一『軍政期日本統治下南洋群島における内地観光団』立教大学大学院観光学研究科博士学位申請論文、二〇〇六年度。

日本はアジア太平洋戦争期までミクロネシアを南洋群島として統治した


南洋群島地圖
昭和十四年四月末日調
凡例
委任統治界
支廳界
海底電信
離島間航路
汽船航路
注意
委任統治界及支廳界ハ概略
島嶼トノ區界ヲ示スモノニ
シテ境界ノ位置ヲ示スモノ
ニアラス
中華民國
朝鮮
本州
四國
九州
臺灣
比律賓
ルソン
ボルネオ
セレベス
ニューギニア
サイパン支廳
マリアナ群島
委任統治
帝國
日本
ヤップ支廳
ポナペ支廳
トラック支廳
ヤルート支廳
ヤップ
ポナペ
カロリン
島嶼
(ウェーク島)
島クーク
島ルーピ
島ルロトーフ
島ルーカポ
島ルクナ
島ルシャシオ
島ルーゴ
島ルーガ
島ルーセ
島ルーシ
島ルーリ
島ルーリ
島ルーリ

江戸庶民の行動文化

四季の日帰りレクリエーション活動の楽しみ

文 橋本俊哉

江戸時代の後期、社寺詣でや湯治などの旅、四季の行楽や祭礼、縁日、歌舞伎などが大都市でさかんにみられた。こうした社会現象は時代を映し出す鏡であり、観光の歴史的変遷をたどる意味で興味深い研究対象である。本稿では、江戸庶民の日帰りレクリエーション活動に注目する。

図1　鍬形蕙斎「江戸一目図屏風」

はじめに

江戸時代の百科事典や歳時記類をみると、年間を通してくり広げられる行事がいかに数多いかに驚かされる。江戸文化史研究で名高い西山松之助は、江戸時代の後期に、大都市で盛んにみられた文化的現象を「行動文化」と位置づけた。具体的には、社寺詣でや湯治などの旅、四季の行楽や祭礼、縁日、歌舞伎等々、消費衝動に根ざす幾多の文化的行動に参加する人口が急増した社会現象をさす。これらの個々の活動は、貴族や上層の武家を中心としてそれ以前から見られたものであったが、庶民層の生活水準が向上するなかで、身分社会を超えて、膨大な数の人びとが時空間を共有するようになったのである。わけても19世紀はじめの「化政期」（文化・文政時代）は、それが花開いた時代であった。

こうした社会現象は、筆者の専門とする観光行動の視点からも、時代を映し出す鏡ともいえる観光の歴史的変遷をたどるという意味でも、興味深い研究対象である。本稿では、当時の江戸における行動文化のうち、近郊の自然空間で四季それぞれに展開された日帰りレクリエーション活動に着目し、当時の文献をもとに、その一端を垣間見ることとしたい。

図2　栄之「汐干狩り」（深川洲崎）

「水の都」江戸

「江戸」の名前そのものが「川の入り口」を意味しているように、江戸は自然の条件を巧みに活かしながら、長い年月をかけて自然河川をつけかえ、新たに掘割を掘削して計画的につくられ、発展してきた「水の都」であった。【図1】を見てほしい。19世紀初頭（1809年）、現在の葛飾区周辺上空からの視点で、当時の江戸の姿が一望のもとに表現されている。この図には手前に流れる隅田川と、富士山の右下に描かれている江戸城の間には河川、堀、運河が縦横に走る様子が描かれている。町人の居住地域である下町が水と密接に結びついた空間であること、その先には、海抜20～50m程度の平坦地をもつ緑豊かな田園地帯（山の手台地）が広がっていることが、容易に理解できる。幕末に江戸を訪れたスイスの外交官アンベールは、「世界のあらゆる大都市のうちで、江戸は、その位置と気候と豊富な植物と

図3　歌川国貞「隅田川東岸花見図」

流水のたくさんある点で、一番自然に恵まれている。――中略――水門で給水している貯水場、池、堀、船の通れる運河の網がお互いに連絡し合って、自然の流れとなり、市の商業の中心部を流れ、巨大な首都に民衆的な活気を与えている」と記している（アンベール『絵で見る幕末日本』）。

野遊びと花見

春になると江戸っ子は、野に出かけヨモギやセリなどを摘んだり（『摘草』）、浜で「潮干狩り」に興じたりした。とくに潮の満ち干の差がもっとも大きい春の大潮の日には、早朝から舟で沖合に漕ぎ出し、広大な干潟に降りてアサリやハマグリなどを拾い、水遊びをして過ごした【図2】。春の日差しの中、野外に遊ぶこのような「野遊び」は、通常酒や食事を携えたもので、趣味と実益を兼ねた、この時期の欠かせない楽しみであった。

江戸の花見といえば、まず上野が有名であったが、八代将軍吉宗が計画的に植樹したことで、飛鳥山や御殿山などの新たな桜の名所が誕生した。向島、墨東と呼ばれる隅田川東岸地域は、川辺に沿って田園が広がり、四季折々に人びとが好んで出かけた地であったが、ここもまた、寛永年間に家綱がこの地に桜を植え、享保期に吉宗が植え足したことで桜の名所となる【図3】。ここはとくに夜桜を愛でる人が多く、幕末期の江戸の様子を記した『江戸府内絵本風俗往来』では、「花見の場所数ある中に墨堤の花見に上こす賑わいはなし」と描写されている。

蛍狩りと川開き大花火

旧暦5月は蛍狩の季節である。神田上水の落合土橋の様子は「玉のごとく、また星のごとくに乱れ飛んで、光景、最も奇とす。――中略――草場にすがるをばこぼれぬ露かとうたがい、高く飛ぶをばあまつ星かとあやまつ」と記されている（『江戸名所図会』）。

旧暦5月末からの3カ月間は、江戸第一の名所・隅田川がもっとも賑わいをみせる時期で、茶屋や料理屋の夜間営業、花火や納涼船が認められていた。とくにその川開きの日の両国の祭りは、夏の開幕を告げる大イベントであった。【図4】この日の花火は、享保18（1733）年、前年の飢饉とコレラによる多数の死者を弔う慰霊祭として始められたもので、次第に納涼の季節到来を祝う行事としての意味合いが濃くなってゆく。

隅田川の夏の花火は、明治に入ってもその賑わいは相変わらずであった。1877年の夏の花火を見学した東京帝国大学の動物学教授モースは、「川の光景には思わず茫然とした。広い川は見渡すかぎり、各種のボートや遊山船で埋まっていた」と、その体験を印象的に記している（モース『日本その日その日1』）。なお、川開きの花火のとき、川面では、混雑した舟と舟の間を酒や小料理を売る舟が漕ぎまわり、芸人達は音曲を奏でて回った。モースはその混雑ぶりとともに、川面が混み合って舟同士がしばしば接触や衝突しても船頭たちが怒鳴らずに譲り合う様子、酒宴が物静かにとり行われている様子を書きとめている。

図4　歌川豊国（三代）「東都両国川開之図」

図5　歌川広重「東都名所　廿六夜待遊興之図」

月見と虫聴き

旧暦7月末には、二十六夜の月を拝む「廿六夜待」という行事があり、人びとは高台や海岸、川辺に集まって月の出を待った。これがとくに盛大に行われたのは品川や高輪である。【図5】には、芸者や芸人が行き交う道の向こうに見物客目当ての屋台や茶屋が並び、たくさんの人びとが遅出の月を待っている様子が描かれている。この日には、海岸で花火が打ち上げられ、海上にも弁財船や小舟が数多く停泊するなどして、夜通し賑わいを見せたという。

これに対して、十五夜の月見は、このような賑やかな月見とはだいぶ趣がことなる。中でも、月の光をさえぎるものがない川面は十五夜の月見に格好の場で、直接月を眺めるばかりではなく、水面に映った揺れる月を観賞することが好まれる優雅なものであった。とくに墨水（隅田川）の月見の素晴らしさは、文章であらわせないほど（『墨水月夜の勝景は他所に勝れ、筆端の及ぶところにあらず』『東都歳時記』）と記されている。【図6】

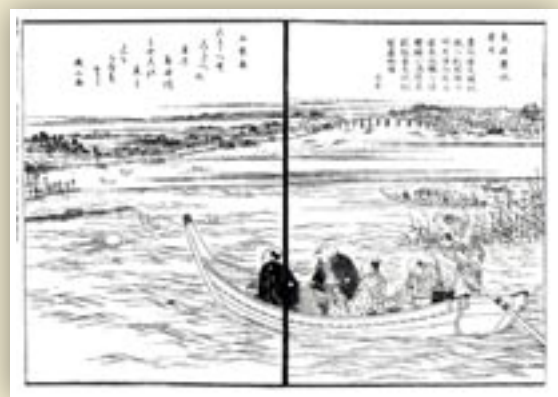


図6　『東都歳時記』「良夜墨水看月」

また、初秋の風雅な行楽に「虫聴き」があった。日暮れを待って草むらに鳴く松虫、鈴虫などの音色を愛でる虫聴きの名所は、山の手台地上や隅田川東岸地域などに数多くあり、これらの地には、庶民が提灯をつけて出かけたという。道灌山（荒川区西日暮里）は、東面に眺望が開けた台地端のため、あわせて月見も楽しめることもあり、その中でもっとも名高い名所であった。【図7】

雪見の名所

旧暦11月の行事のひとつに、雪景色で有名な地をたずね、美しさを楽しむ雪見（看雪）があった。その名所には、川沿いや不忍池、溜池などの水辺のほか、湯島台、飛鳥山など見晴らしのよい高台があげられている。東都歳時

記の「看雪」の第一にあげられているのが隅田川堤で、【図8】には、開けた川岸の景観を背景として川辺の雪の中を歩き回る男女が描かれている。

「行動文化」登場の背景

ここまで、江戸の人びとの四季それぞれの楽しみかたを、近郊での日帰りレクリエーション活動に焦点をあてて紹介してきた。他にも、梅や藤、蓮、菊などの季節の花を見に、鶯や時鳥（ホトトギス）などの鳴き声を聞きに、また秋には紅葉狩へと、江戸の人びとは、季節ごとに花鳥風月の楽しみを求めて、それぞれの名所へ出かけた。その楽しみかたにしても、花見や花火、廿六夜待のような享楽的な要素の色濃い行事と、蛍狩や虫聴、隅田川の月見など、風流・優雅な面とが混在し、今に通じる日本人の自然との接しかたの様子がうかがえる。

江戸の人口は、【図1】の描かれた100年前にあたる18世紀の初頭に、すでに100万人を超えると推定されており、当時ヨーロッパで最大のロンドンをしのぐ大都会だった。居住区域は山の手が武家屋敷、下町は庶民（町人）に区分けされ、とくに狭い長屋に住む庶民は6万人／㎢を超える驚異的な過密状態で暮らしていた。6畳1間の長屋に家族みんなで暮らす庶民の居住環境がいかに窮屈なものであったかは、落語や時代劇の舞台を思い起こせば、容易に理解できよう。

図7　『江戸名所図会』「道灌山聴虫之図」

人は身近な自然が失われるほど、無意識のうちに自然を求める行動（「求自然行動」）がみられるようになる。このような生活環境にあった彼らは、たんなる楽しみのためだけではなく、内なる求めに応じて、四季それぞれに郊外の緑の地に、そして開放感のある水辺に、向かったのであろう。なお、彼らは長屋でも軒下で朝顔のような花を楽しんでいたし、江戸後期には金魚売や虫売が登場し、日々の生活をうるおしていた。これらも、無意識のうちの「求自然行動」であったとみなすことができる。そして、庶民の居住区域が限定されていたことは、近場に豊かな自然環境を保つことに好都合であった。そうした自然が、魅力的な日帰りレクリエーションを楽しむ受け皿として、四季それぞれの名所となってゆくのである。

このような庶民層の居住環境と江戸近郊の恵まれた自然環境があり、それに加えて、日本人の四季の自然を愛でる心、さらには、名所案内や歳時記などの「観光情報」の普及とそれを支える庶民の高い識字率などの条件のもと、江戸時代の後期に多彩な「行動文化」が展開したのであった。

おわりに

現在の東京においては、四季それぞれにこのような風雅な生活を送るすべもない。しかしながら、たとえば、浅草寺の暮れの「歳の市」が江戸でもっとも賑わったことは、消費が毎年12月に最大の伸びを記録する現代と重なるものである。こうした経済活動も含めて、季節のリズムを忘れがちな私たちの生活もまた、1年という周期、自然のリズムに強い影響を受けていることは、変わりがない。

図8　江都名所隅田川雪見之図

都市をひとつの生命体とみなせば、大切なことは、都市の年齢にかかわらず健康であることであり、生きることのエネルギーに満ちあふれているかどうかが、都市の健全性をはかる指標となる。統一感の無い街並みや乱雑な看板類、空を覆う電線など、東京は美しさとはほど遠い猥雑さをもちながら、底知れない活力やエリアごとに個性が感じられることが、観光者を引きつけている。それは東京が、次つぎと新たな流行を生み出し、絶えず表情を変化させるエネルギーをもつこととに加え、歩いて楽しめ、人が主役となれるヒューマンスケールの空間や、四季を感じさせる行事など、歴史のなかで培ってきた遺伝子をあわせもっているからである。1980年代以降に進められているウォーターフロントの再生にしても、失われた「水の都」の記憶を呼び戻す作業であるといえ、新旧の要素のコントラストが強調されることも少なくない。【図9】そうした歴史の記憶に支えられた基礎体力が備わっているからこそ、表向きの表情は他の現代都市と似通っているとしても、大都市東京のもつ個性はにじみ出て、観光者に伝わるのであろう。

モビリティが高まり、私たちはその気になれば世界じゅうの都市を訪ね、比較することができる時代となった。だからこそ、その都市がもつバイタリティと個性の源泉となる、その都市固有の遺伝子を、現代社会の枠組みのなかで、どのように都市計画や景観整備に組み込めるか。それが、健全な都市の体力づくりの重要な課題となる。

明確な四季をもち、自然のリズムと歩調をあわせた季節ごとの「行動文化」を改めて知ることは、行動メニューの面からみても、計画論的にも、わが国のこれからの観光を考える上で、多くのヒントを提供してくれるのである。

図9　東京・お台場（「東京観光財団」絵はがきより）

参考文献
●長沢利明『江戸東京歳時記』吉川弘文館2001年
●東京都江戸東京博物館監修『年中行事を体験する』中央公論新社2002年
●高橋達郎『季節とあそぶ 江戸ごよみ12ヶ月』人文社2007年

パリ・シャンゼリゼ大通りにおける空間利用調査

松村研究室（観光学部）

松村研究室では、
盛岡とパリをフィールドに
観光地理学の視点から
地域調査を行っている。
2007年11月、
私たちはパリ巡検に旅立った。

シャンゼリゼ大通りにおける
小売店の分布（2007年11月）
※2007年11月3日の現地調査により作成

凡例
- 衣料品
- 宝飾・高級身回品
- 自動車ショールーム
- その他の物品

写真／松村公明、呉晨峰、大野結菜
原図／MICHELIN（2007）：1/10,000「Paris」

地図を片手にフィールドへ

松村研究室では、盛岡とパリをフィールドとして、観光地理学の視点から地域調査を試みている。２００６年４月の研究室開業からまだ日が浅く、フィールドノートもほとんど白紙ではある。そのため、研究室の標語は「地図を片手にフィールドへ飛び出す機動力」、まずは現地に赴いて、場所を実感してみることからすべては始まる、という解釈になっている。

ここでは、私たちのフィールドノートより、２００７年11月２日～４日のパリ巡検（excursion）で実施の、シャンゼリゼ大通りにおける空間利用調査について紹介する。

空間利用調査とは

２００７年11月３日、早朝からの降雨は幸いにも終息したが、気温は10℃の寒空。ホテルからは昨日の道筋を変え、最寄りのGrands Boulevardsでメトロ⑧号線に乗車、Concordeで①号線に乗り継いだ後、シャンゼリゼ直下のGeorgeVで下車する。午前10時、シャルル＝ド＝ゴール広場（標高59m）からエトワールの凱旋門を背に、１km先のロータリー（ロンポワン　円形交差路）（標高34m）目指して出発する。装備は伝統的で、左手で抱え込むA４判のクリップボードにはベースマップと野帳のページが貼り付けられ、右手には鉛筆と赤鉛筆が挟み込まれ、さらにポケットには充電器ならぬ携帯用鉛筆削りが隠されている。ベースマップは、Google Earthからシャンゼリゼ沿線の精細画像を縮尺およそ１２５０分の１に合わせて印刷したA４判プリントをつなげたもので、調査区域をカバーしている。

空間利用調査とは、日本の都市では調査対象地域に分布するあらゆる建物のあらゆる空間を、用途名や記号化された凡例で充たしていくことである。しかしパリでは時空間的な制約から、ベースマップに１つ１つの建物（敷地）の境界を書き入れ、街路に面する１階部分の空間を対象として、店舗名や業種・販売品目を主体に記録していくことに

①セーヌ河畔トゥルネル河岸（Quai de la Tournelle・5区）　②マリー橋（Pont Marie・4区）。マレ地区とサン=ルイ島を結ぶ。写真奥はシテ島のノートルダム大聖堂　③メトロ7号線ル・ペルチエ駅（9区）　④サン=メダール広場（Square St Médard・5区）　⑤クロヴィス通りに残るフィリップ・オーギュスト王の城壁（5区）。パリを防御するために1180年～1210年にかけて建設。

した（日本とは異なり、フランスの都市では建物上階部分の用途はブラックボックスとなる）。目を凝らして観察する。相談する。再び見る。相談する。ベースマップに記録する。見上げてみる。地道で気の長い工程ではあるが、着実に完成に向かう工程でもある。昨日全員で訪れた国土地理院（IGN）の地図ブティックがBoétie通りに見える。

午前11時45分、街路両側に分かれてやって来た調査班が、ロンポワンにそれぞれ到達して一団となり、空間利用調査は終了した。

パリらしい商店やカフェは意外に少ない

研究室では自らの観察と聞き取りによって収集したデータ、すなわちオリジナルデータを地図上に整理し、場所の形成と変容過程を、多様な地域スケールから考察しようとする。❶パリが東京と同様に、都市システム上の世界都市と位置づけられるとすれば、シャンゼリゼと銀座の店舗構成に共通点はみられるのだろうか。❷物品販売店やカフェの分布は、シャンゼリゼの北側歩道に高密度であり、あたかも日向（ひなた）集落の感がある。これは日照時間の短いヨーロッパの都市では、一般的な現象なのだろうか。場所独自の要因があるとすればどのようなものなのだろうか。❸シャンゼリゼは、パリ都市軸を体感できるパースペクティブの点で、まさに「国の光を観る」場所であることは確かである。しかし、それと同時に、パリらしい個人商店や伝統的なカフェが意外に少ないことを改めて確認した。従来から指摘されてきたことであるが、「パリの匂いがしない」、「シャンゼリゼに立地する理由がない」種類の店舗が、企業の広告塔として出店した結果、店舗の業種・業態構成は大幅に改変されてしまった。この改変はどの地点に、いつ頃から強まってきたのだろうか。パリ市当局による最近のシャンゼリゼに関する憂慮の表明は、この傾向を抑制するのであろうか。

最後になるが、現在においては最新の地図が過去の貴重な地図に変貌する未来を、私たちは空想する。今そこにある地理情報をコツコツと調査し・地図化してくれる学生達は、まさに研究室の開拓者である（松村公明）。

参加学生の声

今回、調査の対象となったシャンゼリゼ通りは、世界で最も有名な通りと言ってもよい。そのような大通りに面した店を一軒一軒、業種と店名を書き留めるという地道な作業を続けた私たちであるが、実際に調査をしてみて、ありふれた商店街化が進んでいると感じた。世界的な知名度を誇る一方で、観光地化の短所が浮き彫りになってしまったように感じた。

これまで観光客が訪れる場所をこんなにじっくり歩いた経験はない。シャンゼリゼを訪れて、パリを象徴する場所であるということを実感したが、じっくり見てみると、ファーストフードをはじめとして東京でも見たことのある店が多く、パリらしさが感じられるのはカフェの雰囲気と建築物の様式ぐらいであった。もし自分が観光客という立場であれば、そのような店舗の集積をそれほど深く考えることなく、感激してしまうだろうと思った。

盛岡調査

最新の盛岡調査は2008年3月。パリと同じ手法に聞き取り調査が加わって、街の記憶が地図に落とし込まれていく。

旅行業と宗教

日本の観光の原風景としての

中西裕二

写真協力：熊野本宮大社、和歌山県広報室、岩本楼

日本の観光を歴史的にみると、スタートラインは宗教という領域だといえる。その起源としての熊野詣を例に、中世以降整備されていく日本の「観光業」の原風景を探る。

熊野大門坂

「観光」成立の前提条件

観光が産業として成立するために必要なものは何だろうか。観光学部の学生なら、手元にある履修要項を開き、授業カリキュラム表を見ればおおよそ見当がつくだろう。観光は基本的に移動を伴うため、道路、鉄道、航空といったハード面が不可欠だし、途中に泊まる宿も必要となる。次に、目的地や経路に関する情報といったソフト面。我々が観光するとき、ガイドブックは必携である。そして最後に、目的地がどこで、そこには何があるか。観光は目的地がなければ成立しない領域である。

この三つの要素が有機的に関連し、産業として確立しているのが近現代の観光産業といえる。この成立の背景には、交通や情報に関する技術革新がある訳だが、これらの進歩により「観光」は近代に突如出現した領域なのであろうか。歴史的にいえば、必ずしもそうではない。日本では、産業としての観光は近世（江戸時代）には既に登場していたし、右記の三つの要素は既に中世あたりから徐々にだが整備され始める。だが、それは現代でいう「観光業」として始められたのではない。では何がスタートラインかといえば、それは宗教という領域なのである。

巡礼と観光

日本では、既に平安末頃から巡礼という形態で、現在の「観光」に似た行為が行われていた。その起源、あるいはモデルといえるのが熊野詣である。京都の朝廷、公家が、現在の和歌山県新宮市の熊野三山（熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社）へ参詣する熊野詣は、対象となる宗教施設や参詣道が「紀伊山地の霊場と参詣道」（通称「熊野古道」）として世界遺産に登録されている。

平安期に理論的に確立した本地垂迹思想（日本の神を仏の仮の姿と考える思想）と浄土信仰の浸透により、平安期から熊野地方は朝廷や公家の信仰を集めるようになった。熊野本宮大社の神は、西方極楽浄土へ人々を導く阿弥陀仏の垂迹神だったからである。熊野信仰は「蟻の熊野詣」とも呼ばれるほどの信仰を集め、熱烈な熊野信者といわれる後白河上皇（一一二七～一一九二）は、生涯に三〇回以上も熊野詣を行ったというから、その熱の入れようは相当なものだったのだろう。

当時の熊野詣のルートは、京都から南西に下り、さらに和歌山市あたりから海岸沿いのルートを南下、田辺市から内陸に入る山道（中辺路と呼ばれる）で熊野本宮に至るのが一般的であったようだ。だが、鉄道や車がなかった当時、京都から熊野までは約一ヶ月かかったので、宿泊場所の確保が必要となる。また、ガイドブックがなかった当時では、案内役のガイドも不可欠だ。これらの領域をカバーしたのが他ならぬ熊野の宗教者たちであった。

京都から熊野までの間には、熊野権現を祀る「王子」と呼ばれる寺社が建てられ、ここが宿泊の役割を担当した。またガイド役は「先達」と呼ばれる熊野の宗教者であった。そして目的地は寺社である。つまり、現在の観光業と呼ばれる領域のほとんどは、宗教組織と宗教者によりカバーされていたのである。

熊野本宮大社（和歌山県新宮市）

巡礼の大衆化と宗教

熊野信仰とその組織は、その後日本全国に成立する霊山のモデルになったようである。卑俗な言い方で恐縮だが、現代の用語でいえば、信仰を巡礼としてパッケージ化することに成功したビジネスモデルが熊野信仰といえるかもしれない。

巡礼はその後、中世的世界の崩壊により転換期を迎える。それは、信者＝顧客（クライアント）の変化である。中世世界の中心であった京都の朝廷・公家の政治経済力の弱体化は、おそらく宗教者の側にも強い危機意識をもたらしただろう。荘園体制の崩壊で寺社が支配していた所領からの収入は減り、一大パトロンだった朝廷や公家は弱体化する。このような社会的状況の中で、宗教側にとっての新たなターゲットが登場する。それが政治的・経済的な力を増した民衆なのである。

江戸期にとくに興隆するお伊勢参りはその典型だろう。中世、伊勢神宮の中に農耕神を祀るとした「外宮」が確立したことで、外宮への巡礼＝お伊勢参りは民衆のニーズを満たし、伊勢の反映の礎を築くことになる。この時、伊勢参詣へのガイド役はやはり「先達」という名称で、現地での宿泊の世話から外宮への参詣、お札の販売までを一

括して担当していたのが「御師」（おし、おんし）である。御師は半ば宗教者であり、半ば旅館の経営者であり、かつ現地のランドオペレーターというべき存在であった。現在も、伊勢で旅館業を営むが、その起源が御師である家は数多く残っている。

近代化と宗教者のサバイバル

このように、日本の巡礼文化を、一種の観光産業として発展させたのが宗教と宗教者だった。このシステムの一大転換は、明治期の宗教政策が契機として起こった。明治政府は国家神道を創り出したが、これは御師のような人々にとって誠に都合の悪い制度であった。神祇祭祀が国家により規定された「神道」という枠組みに包摂されたことで、これまで神の祭祀に関わってきた宗教者が「神道」を実践する宗教者であるかどうか、国家が厳密にチェックするという事態が起きたのである。御師のような、世俗と宗教の中間的位置を占めていた人々は、基本的に宗教者ではないとされ御師制度そのものが規制の対象となっていった。また熊野を中心に発展を遂げた修験道は神仏混淆ゆえに禁止され、江戸時代までは一般的であった社僧（神社で神を祭祀する僧侶）は還俗するという、日本の宗教文化を根本から変える政策が実施されたのである。

このような事態に直面した宗教者たちがとったサバイバル戦略の一つが、宗教色を捨て観光業に特化するという方針転換だった。伊勢の旅館の例ばかりでなく、元々寺院だったり、御師や先達をしていたという旅館や交通業者は意外に多いようである。その一例として、神奈川県藤沢市の江ノ島をとり上げてみよう。加山雄三、サザンオールスターズの唄でも知られる江ノ島と湘南海岸は、神奈川県を代表する観光地だが、観光地としての歴史は江戸時代から数百年の歴史をもっている。

江戸時代の江ノ島は、富士を背景とした風光明媚な地として知られる一方、江島弁財天への参詣地でもあった。この双方の側面、風光明媚な場所にある宿泊所と宗教施設を兼ね備えていたのが寺院であった。江島弁財天は「神」であるが、この「神」に関わる宗教者が仏教者だった訳である。江ノ島にはかつて岩屋本宮、上之宮、下之宮の三社があり、それぞれに別当（真言宗の社僧）がいて、彼らが宗教者と旅館業双方の役割を果たしていた。しかし神仏分離により、彼らは宗教者としての地位を剥奪される。そのとき、岩屋本宮を祭祀していた岩本院（岩本坊）は旅館業へと「転職」した。現在の江ノ島の老舗旅館、岩本楼がそれである。

現在の岩本楼の中には、「岩本資料館」として岩本院の資料を展示しており、また、江ノ島の岩屋にあったという八臂弁財天はロビーに鎮座されている。観光客の目に留まりにくいが、観光と宗教の関係を教えてくれる貴重な文化財といえるだろう。

現代の御師

伊勢神宮の外宮の御師たちや、山梨県富士吉田市の富士講の御師たちは、基本的に自らの宗教色を消し去り旅館業に特化していったが、わずかながら御師としての活動を継続させた地域もあった。丹沢の大山講の御師集落、青梅の御岳山山頂の御師集落が関東では知られている。明治期の大変革を乗り切り、よくぞ現在まで続いたものだと感心してしまう。ここでは武州御嶽信仰の中心地として、江戸期以降関東一円に信仰が広まった青梅の御岳山をとり上げてみよう。

私がゼミの学生を連れて泊まった御嶽山山頂にある駒鳥山荘は、山あいの宿を彷彿させる現代的な屋号となっているが、三五〇年ほど続く御師の宿である。宿のご主人、馬場喜彦さんは、この宿を経営する一方、国学院大学で神道の免状を取得し、昔ながらの御師としての活動も続けている。

御岳山の山頂には、馬場さんのような御師の宿が三〇軒ほどあり、それぞれの御師は東京、埼玉、神奈川を中心に各地の御嶽講（地域での御嶽信仰の信者組織）と関係している。春から夏にかけては山上に参拝する御嶽講の講員の宿となり、逆に秋から冬にかけては、御師が山を降り御嶽講の講員の家を回ってお札を配り、ご祈祷をする。このような昔ながらの御師と御嶽講の関係が、時代の影響を受けつつも、現代でも続けられているのである。

鎌倉時代に端を発する岩本楼
写真／岩本楼

馬場さんは御岳山の御師であるが、職業としての御師とは何であるか、現代に生きる人間には分かりづらいかもしれない。なぜなら、私たちが考える「職業」とは一人につき一つが原則だからである。馬場さんは、宗教者でもあり経営者でもあるという、聖と俗の双方の側面をもっており、そのどちらが主だとは言えないし、それが御師という存在の特徴なのである。馬場さんとお話ししていると、「冬に講員の家を回る活動も、現代風にいえば営業活動に近いですかね」という言葉が出てくると思えば、登山をするハイカーにも親切に対応し、大きな祭壇のある宿の大広間では、きりりとした白袴をまとい迫力のある祝詞を上げる。しかし、この聖と俗が混在する御師の姿こそ、日本の宗教の、そして日本の観光の原風景といえるだろう。

観光と「歴史」

遺産という言葉は、その対象が近代を生きる我々とは隔離された、現存しないものだという意味に捉えられがちだ。歴史遺産の観光という場合、生きており、生活している人々はそこにはいない。訪問者は、遺産から生を想像するだけである。だが、そのような観光地の裏側には、これまで述べたような歴史もしばしば存在する。御岳山の御師集落は、伝統的建造物群保存地区に指定されている訳ではないし、そもそもこの地が歴史文化遺産だという発想は、地区の中にも外にもないようである。それはある意味で当然かもしれない。なぜなら、そこでは御師の人々がいままさに御師として日常を過ごしているからである。私たちは観光と歴史の関係を考える際、失われた過去を示す遺産ばかりに目が奪われがちだが、日々の日常の中にも歴史はあり、それが意外にも観光と深い関係をもつこともあるのだ。日本において宗教は、単なる文化財的、歴史的遺産としての価値のみではなく、むしろ観光／歴史／文化／遺産の間の、からまった糸をほどく端緒を与える立ち位置にもなるのである。

Book Review

読書案内

日本人の海外旅行の歴史をめぐって

本号の特集テーマ「観光と歴史」に関連する書籍の中から今回選んだのは、戦前、戦後の日本人の海外旅行をめぐる2冊。

海外観光旅行の誕生

有山輝雄 著
吉川弘文館（2002） 1785円

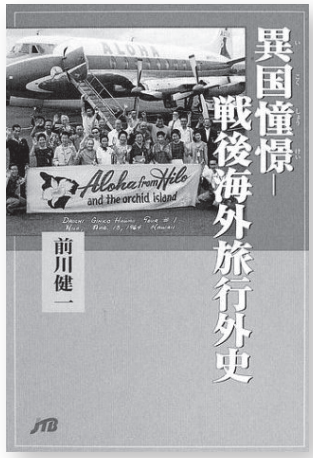
日清・日露戦争を経て近代日本は、朝鮮半島や「満州」といった東アジア各地を、自らの影響下あるいは統治下に置いていった。本書で主に取り上げられるのは、近代日本が勢力圏を拡大していくなかで発現していった、「海外観光旅行」の姿である。

本書で使われる「海外観光旅行」という語には、ふたとおりの意味がこめられている。つまり第一が、日本本土から日本の勢力圏としての「満韓」へと出掛けていく旅行であり、その参加者はもちろん、日本人たちであった。著者がここで指摘するのは、当時のマス・メディアである新聞を発行する新聞各社が、この類の旅行の多くを主催したという点であって、確かに、最初の「満韓」旅行は、1906年に朝日新聞社によって企画されている。

本書における「海外観光旅行」という語の第二の含意は、第一のそれとは逆に、日本の勢力圏である「満韓」から日本本土へと向かうものである。無論、この旅行には「満韓」居住者が参加し、特に1909年に韓国から日本を訪れた一行には、反日的な志向を持つ政界有力者たちが参加していた。そして、この「海外観光旅行」にも新聞が大きく関わり、日本各地を見てまわる「満韓」からの参加者の様子が、逐次、各新聞紙上に掲載された。

その他、本書では、1908年に朝日新聞社が募集した世界一周旅行や、1909年から翌年にかけて日本を訪れたアメリカからの観光団について触れられているが、本書における著者の関心は、日本にせよ「満韓」にせよ、各地を訪れた参加者たちが、「何」を、「どのように」、「みた・みせられた」のか、そして、当時のマス・メディアである新聞各紙が、そのプロセスにどのようなかたちで関係したのかといった点を、それぞれの「海外観光旅行」が置かれた政治的文脈から考察することにある。

こうした近代日本における「海外観光旅行」の位置づけに着目する本書は、観光をとおして日本が「外」の世界とどのような関係を持とうとしたのかについてを論じたものであると言え、例えば、昨今の「ビジット・ジャパン・キャンペーン」の現代的意義について、改めて考える上でも有益な視点を我々に提供してくれよう。



異国憧憬——戦後海外旅行外史

前川健一 著
JTB（2003） 1575円

「旅行業界には海外旅行史の内部資料はいくらでもあるのだが、私が書きたかったのはそうした旅行業界史ではなく、旅行者の側から見た歴史である。日本人は何に誘われて外国に行ったのか、外国の情報をどう得たのかといったことから始まり、海外旅行に関するさまざまな事柄を書いてみたかった」。

著者によって「あとがき」に綴られたこれらのことばが、そして、戦後海外旅行「外」史とされたサブタイトルが、本書のすべてを言いあらわしているように思う。周知のとおり、日本における海外旅行が自由化されたのは、1964年4月のことである。本書では、海外旅行自由化から近年に至るまではもちろんのこと、自由化前夜の状況をも射程に収めながら、ツーリスト側の視点から「海外旅行の戦後史」を描き出すことに主眼が置かれている。

例えば、前半部分では主に、映画、歌謡曲、テレビ・ラジオ番組、雑誌、ガイドブック、旅行記などといった、大衆寄りのメディアの果たした役割が、後半部分では主に、ツーリストの携行品や服装、機内食、みやげものを含めた旅先での買い物事情などの時系列的な変遷が、それぞれ当時の写真資料や関係者の証言とともに再構成されており、これまでの類書とは、明らかに一線を画している。

本書では、戦後日本の「世相」を反映させながら変容していった海外旅行の姿や、一部の「エリート」たちのものであった海外旅行が大衆化していく過程、その海外旅行に参加するツーリストが徐々に「消費者」としての側面を強めていく様子などが、実に鮮やかに描き出されている。よって、本書を通読することは、我々の日常生活においてもはや「当たり前」となってしまった海外旅行の、そして、ツーリストである我々自身の、「生い立ち」を追いかけていくことと等しい。

本書では、戦後日本の歩みと無関係ではあり得なかった大衆観光の横顔のみならず、海外旅行という糸口から読み解かれた現代日本のありようまでもが、見事に素描されているのである。

（千住一）

立教大学観光研究所の活動紹介

北アフリカにおける観光調査

北アフリカという地域を日本、そして観光という視点から眺めた時、すぐに思い浮かぶ有名な観光目的地としてピラミッドやスフィンクスなどで知られるエジプトがあるだろう。しかし、その他の国々については、必ずしも広く知られているとは言いがたい。

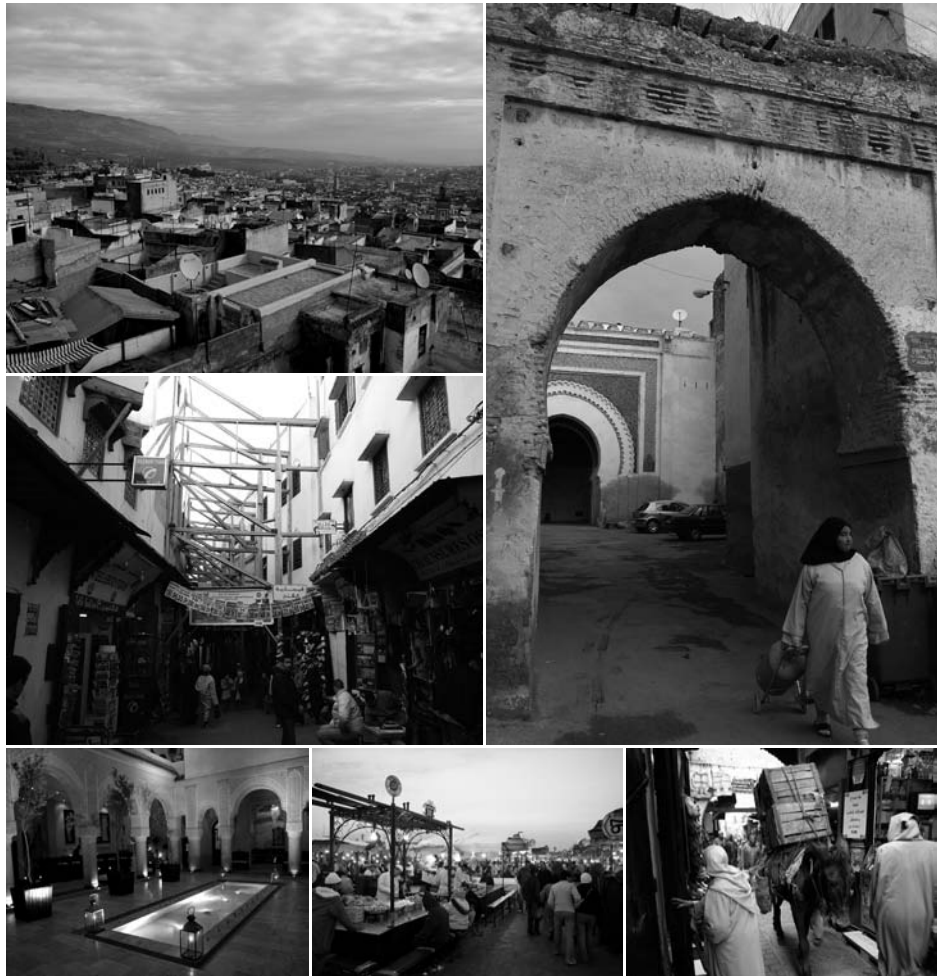
立教大学観光研究所では、２００６年10月に財団法人中東協力センターからの委託研究として北アフリカの観光産業調査を受託し、リビア、チュニジア、モロッコにおいて現地調査を行ったことを契機として、委託研究終了後も観光目的地としての同地域に対する理解を深めるため、２００７年度、北アフリカにおける観光をテーマとした研究所独自の調査研究が行なわれた。

２００７年度は、モロッコにおける重要な都市観光資源と考えられる、モロッコの主要各都市に存在する「メディナ」と呼ばれる旧市街について複数の都市の現状について現地調査が行われた。

モロッコの都市の多くは、旧市街「メディナ」と19世紀にその周辺に発達した新市街とに分かれている。「メディナ」は、城壁に囲まれており、その中に住宅や宗教施設、商業施設など都市のさまざまな機能がすべてそろっており、狭い路地が迷路のように走っている。このような「メディナ」は、モロッコの歴史が凝縮した空間ともなっており、フェズ、マラケシュなど複数の都市の「メディナ」は、ユネスコの世界遺産にも指定されている。同時に「メディナ」の内部は、ヒューマンスケールでできており、現地の人々の現実の生活を観光者が体験、理解する上でも興味深いモロッコ観光の重要な対象となっている。

北アフリカ地域の経済開発において観光は大いに注目されており、そのための基盤をどのように整備してゆくかが今後の課題とされている。歴史遺産、人々の現在の暮らし、そして観光者のための便宜、これらのバランスをとりながら観光を展開するためにはどうしたらよいかを考える時、モロッコの「メディナ」は格好の事例となるだろう。（大橋健一）

モロッコの旧市街「メディナ」



最近の観光学部講演会

開催日	講演者	演題
2007 10／18	高野登 ザ・リッツ・カールトン・ホテル・カンパニー 日本支社長	Legendary Service at The Ritz-Carlton
10／25	アルベール・ヤンガリ 元ガボン共和国 観光・余暇副大臣	Eco Tourism, Parc Nationaux, Biodiversite -Cas du Gabon-（ガボンにおけるエコ・ツーリズム、国立公園、生物多様性）
12／10	島田昭彦 株式会社 クリップ 代表取締役社長	地域活性プロデュース！人と人・文化と文化をクリップする
2008 1／15	バダルディン・モハメド Associate Professor Universiti Sains Malaysia	マレーシアで英語を学ぼう！

在外研究通信　04

United States of America

シアトルの豚パレード

杜 国慶（観光学部）

2007年9月より1年間の在外研究でアメリカ・シアトルに滞在した杜准教授の報告は、ダウンタウンで目にした豚の像とパレードの由来をめぐる考察。

歴史の関係なのか、アメリカの西海岸にはアジア人にとって親しみやすい町が多い。ワシントン州のシアトル市も例外ではない。例えば、ワシントン大学（University of Washington）ではアジア人の学生が多く、大学周辺のレストランもアジア食が圧倒的に大きい割合を占め、中華料理、韓国料理、和食、タイ料理、ベトナムのフォーなどの店が軒を並ぶ。

装飾の異なるたくさんの豚の像

2007年9月にシアトルに着き、ダウンタウンを散策したら、あちこちに豚の像が目に入ってきた。形は立つか座るか2種類しかないが、装飾はそれぞれ異なる。通常の豚とはかなり違うものもあり、観光客は豚の像を見るたびにカメラを出して写真を撮るほどだ。まさにシアトルの街を飾る一つの風景になっている。

最初は、この豚たちもアジアに関連した一つのシンボルかなと思っていた。というのは、2007年は干支で言えば豚年（日本ではイノシシ年というが、起源の中国では豚年という）、しかも普通の豚年ではなく、60年（十干十二支の一巡り）に一度の金の豚年であり、この年生まれた子供は幸福・長寿・富貴の運命を持ち、更に縁起がいいとのことで、中国また華人の間ではベビーブームになっているくらい盛り上がっている。シアトルの豚の像もこの年に合わせて出している飾りだろうと思ってしまった。

回りのアメリカ人に聞いてみたら、確かに豚の像は数年前から街頭に出ていたが、具体的な理由は分からないと言う。数年前からだとすると、2007年の豚年に合わせたわけではないだろう。もし都市のシンボルとして使うなら、港湾都市のシアトルはなぜサーモンとかクジラとかを選ばないのか。この疑問をもって、私は豚の由来を探り始めた。

シアトルの豚の像

パイク・プレース・マーケット

実は、豚パレード（Pigs on Parade）はパイク・プレース・マーケット財団（Pike Place Market Foundation）の推進によって、2001年に発足し、市場のために募金を集めるとともに、シアトルを飾る風景になった。パイク・プレース・マーケットと言えば、シアトルでは現在、スペース・ニードルに次いで訪問者数の多い観光スポットである。

1907年、農産物の高騰に怒った数百人の農民達が農産物をワゴンに乗せてやってきたのがパイク・プレース・マーケットの始まりだった。その後、アメリカの大不況時代に全盛期に突入したが、第2次世界大戦中に農民の多数を占めていた日系人達が強制収容所へ連行され、マーケットの存続が危機に直面することとなった。1960年にさびれてしまったこの市場を駐車場や住宅、オフィスに再開発しようという動きすらあったが、この市場を保存して活性化させようとする動きが現れ、Friends of the Markerという団体

がマーケットの保存運動を開始し、１９７１年に低取得者を保護するため、投票して市場の保存法案を通した。

なぜ豚の像が誕生したのか

それでは、なぜ豚の像が誕生したのだろうか。市場の財団は資金を確保するため、募金箱を設置しようと決断をした。アメリカでは、子供がお小遣いを貯める貯金箱は豚の形が一般的で、英語でもこのような貯金箱を piggy bank と言う。その由来で、地元の彫刻家 Georgia Gerber がかなり大きな豚の形をする貯金箱を作り、市場の入り口に置き、来場者から募金を集め始めた。因みに、２００６年に来場者による募金は９０００米ドルに達したそうだ。

今日、マーケットはシアトルのランドマーク的な存在になっており、地元民だけでなく世界中からの観光客が訪れ、シアトルにとっても重要な観光スポットである。統計によると、平均的に1日3万５０００人の観光客がマーケットを訪れる。マーケットに入ると、まず目に入るのが Pike Place Fish Co. という魚売場である。客が注文をすると、魚をカウンターの向こうにポーンと放り投げ、パートナーがキャッチするのが、見物のパフォーマンスとして有名である。実はこの魚屋は米国テレビ局ＣＮＮに「アメリカで一番わくわくする会社」と認められている。

海産物のほか、色とりどりの新鮮な野菜や果物、花などが所狭しと並べられている。ワシントン州は全米でも有数の農産物の産地であることから、野菜や果物の種類の豊富なことに驚く。奥には土産物になるドライフルーツやアクセサリー類も売られている。また、地下にはアンティーク、ポスター、香、レコード、アクセサリー、バッグなどの小売店があり、すべての店を見てまわるには半日かかるだろう。加えて、カフェやレストランもあるため、食事を兼ねた休憩もできる。

移民と都市再生の物語

映画『Sleepless in Seattle（邦題：めぐり逢えたら）』でトム・ハンクスが同僚と食事をするシーンも、ここのレストランで撮影された。そして、今や世界の大企業に成長したスターバックスの1号店も１９７１年にここで開店され、当時使われていたロゴ（胸を露出した人魚の下半身の魚部分が左右に分かれているリアルな絵）も保存されているため、今日では、この市場はシアトルの観光名所となっている。

このように、パイク・プレース・マーケットは移民、都市再生などの物語を絡んで誕生し、さらにシアトルを飾る豚パレードを育んだ都市の重要な存在である。２００７年はマーケット設立１００周年で、中国の「金の豚」の年でもあり、豚パレードはこの二つの喜びを祝うため、豚の数も１００に揃えた。１００人の豚愛好家にサポートされた１００頭の豚は、6月2日から9月29日まで街頭に展示され、10月12日にオークションで売却された。

パイク・プレース・マーケット

United States of America

2008年度
立教大学観光研究所
公開講座

立教大学観光研究所では、以下の2つの
観光産業の入門的公開講座を実施しています。
学生はもちろん、社会人など広く受講者を受け入れています。

旅行業講座

「国内旅行業務取扱管理者試験」
「総合旅行業務取扱管理者試験」
のための準備講座
（2008年4月開講7月修了）

「旅行業講座」は、毎年10月に全国で行われる国家試験「総合旅行業務取扱管理者試験」とそれに先立ち9月に行われる「国内旅行業務取扱管理者試験」のための準備講座です。旅行業界とその業務に関心を持つ人たちが受講しています。旅行業に必要な専門的、かつ実際的な知識を一流の講師陣が、実務経験のない人にもわかりやすく講義します。講義内容では、旅行業法から海外・国内観光資源、旅行実務などの幅広い内容を扱います。

ホスピタリティ・マネジメント講座

宿泊・外食産業の理論と経営、最新動向を学ぶ
（2008年9月末開講12月修了）

ホテル・旅館業・外食産業を中心とするサービス産業は、今日「ホスピタリティ産業」と呼ばれています。「ホスピタリティ・マネジメント講座」では、ホスピタリティ産業の基本理念から、マネジメントの基礎理論、マーケティング、人事、営業企画、法律、最新の業界動向といった幅広い内容まで、業界の第一線の実務家を講師に招いて講義を行います。

問い合わせ

立教大学観光研究所事務局
（池袋キャンパスミッチェル館）
TEL 03-3985-2577　FAX 03-3985-0279
Email：kanken@grp.rikkyo.ne.jp

詳しい講義内容、受講申し込みについては

http://www.rikkyo.ne.jp/grp/kanken/

次号予告
2008年10月刊行予定

特集

ようこそJAPAN

交流文化
07
2008年5月30日発行

発行人　豊田由貴夫
編集人　大橋健一

デザイン　望月昭秀、仲 麻香
印刷　こだま印刷株式会社

問い合わせ先
立教大学観光学部
〒352-8558　埼玉県新座市北野 1-2-26
TEL 048-471-7375
http://www.rikkyo.ne.jp/grp/tourism/

＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。
©2008 Rikkyo University, College of Tourism. Printed in Japan.

ISBN 4-9902598-3-1

筆者紹介（50音順）

千住 一

（せんじゅ・はじめ）　観光学研究科　兼任講師
1999年、立教大学社会学部観光学科卒業。2001年、同大学院観光学研究科博士課程前期課程修了。2005年、同研究科博士課程後期課程満期退学。2007年、博士（観光学、立教大学）。同大学観光学部助手、同助教を経て、2008年より現職。主要著作に、『「観光のまなざし」の転回』、『観光社会文化論講義』（ともに分担執筆）。

臺 純子

（だい・じゅんこ）長野大学環境ツーリズム学部准教授
中央大学文学部卒業。出版社や編集プロダクションで旅行ライター・編集者として観光に関わる。立教大学大学院観光学研究科博士課程後期課程修了。博士（観光学）。立教大学観光学部助手、助教を経て2008年度より現職。研究テーマは、観光史からみた社会変化と、雑誌などの観光情報が観光に与える影響。

杜 国慶

（と・こっけい　Du, Guoping）　観光学部准教授
中国雲南省出身。南京大学地理系、同大学大学院を経て、1994年に国費留学生として来日。1997年4月に筑波大学大学院博士課程地理学専攻編入学、「中国の都市システムの変化と要因」と題する論文により、2000年3月博士号を取得。2000 ～ 02年日本学術振興会特別研究員。2002年4月より本学観光学部に勤務。主な研究分野は都市地理、都市観光、地理情報システム（GIS）。

中西裕二

（なかにし・ゆうじ）　観光学部教授
1961年生まれ。慶應義塾大学大学院社会学研究科単位取得満期退学後、1991年より福岡大学に勤務。2006年度より現職。専門は文化人類学、民俗学。日本とベトナムをフィールドに、宗教・社会・民俗文化に関する幅広い現地調査を行っている。

橋本俊哉

（はしもと・としや）　観光学部教授
1985年立教大学社会学部観光学科卒業、同大学大学院社会学研究科博士前期課程・東京工業大学大学院理工研究科博士後期過程修了。工学博士（1994年東京工業大学）。専攻は観光行動学ならびに観光者の視点からの観光計画論。主要著作『観光回遊論』、共著に『観光の社会心理学』、『21世紀の観光学』、『現代観光総論』など。